

分科会報告：高等学校・大学の部(テーマ2)：
多言語教育推進のための教員の取り組み

大森 洋子

本分科会では、英語以外の外国語教育を推進している教員による4つの取り組みが発表された。つまり、神奈川県が多言語教育ネットワーク構築、フランス語の学習指針、日本の韓国朝鮮語教育と韓国の日本語教育の連携による交流学习、そして言語学習を通じた人間形成に関する事例報告が行われた。以下にそれぞれの発表の骨子と質疑応答を報告する。

1. 「神奈川県の多言語教育ネットワーク構築に向けて」

発表者：北川郁子(神奈川県立百合丘高等学校)

山下 誠(神奈川県立鶴見総合高等学校)

多言語教育充実のために教育ネットワークの構築に取り組んでいる。高校多言語教育の先進県である神奈川県においても、教員の世代交代・成果の継承、県立高校改革による設置校数3割削減等、課題は山積みである。そのため学校運営に参加できる多言語人材の発掘が急務である。そこで、神奈川県立高校の専任教員有志会合を設立し、持続可能な多言語教育活動を呼びかけた。その結果、多言語教育にかかわる教員のネットワークが構築でき、①現在、すでに諸言語教育に携わっている、②近い将来に諸言語授業を担当する機会・意志がある、③英語の教員でありながら英語一辺倒に疑問をもっている、④現在、諸言語を学習中であるという人材が集まった。

もう一つ別の流れを紹介する。エスペラント語の存在に触れることで、新たな世界を知ることになる。例えば、第2回JACTFLワークショップを「複言語・複文化共生」をキーワードに行った。また、多言語模擬授業など複数言語を学習する機会を設け、スワヒリ語他を導入し、それぞれの言語による挨拶の表現を紹介した。少数言語を導入することにより、多文化理解が深まり、初めて知った言語に親しみを感じ、言語学習に対して寛容になる。

新学習指導要領で指摘されている4技能5領域を視野に、今後も、神奈川県において教育委員会にも働きかけ、拠点校を中心に研究開発を進める。

質疑応答やコメント:

ネットワークにはどのような人材がいるか。

—ある特定の外国語に興味があるだけの人もいれば、教える技術を持っている人もいる。

情報提供として、福岡県では、国語や社会の教員免許を持ち、英語や韓国語が出来る人材を採用したいという。長崎県・対馬では韓国語教育にも力を入れている。

母語が大事であり、母語が身についた高校生の外国語教育を考える場合には、英語だけではなく他の言語を教えることも大事ではないか。

—その通りである。複眼的に思考をするためには英語のみではなく、複数言語の必修化が大事である。

対処療法に近いが、4技能5領域にはそれなりに意味はあろうが、話す内容とプレゼン能力を教える場合、英語の授業を模倣しても難しいのではないか。

—英語教育に従う場合もあれば、英語教育とは異なる立場で考えることもあり、今後の課題である。

2. 「外国語学習の指標—フランス語の場合—」

発表者: 武井由紀(名古屋外国語大学) 野澤 督(慶應義塾大学)

菅沼浩子(聖母被昇天学院中等高等学校)

中野 茂(早稲田大学高等学院) 茂木良治(南山大学)

山田 仁(アシェット・ジャポン) 古石篤子(慶應義塾大学名誉教授)

これまでの経緯と問題点としてまず、行政面の動きを振り返る。

外国語教育多様化研究協力校の指定(33件)により、フランス語、中国語、朝鮮語、ドイツ語のほかスペイン語やロシア語の取り組みが行われた。この時点でチームティーチングの模索や授業担当者の確保や指導体制の懸念は既にあった。フランス語の教材に関しては、ニーズに合ったふさわしい教材の開発が必要であった。その後、高等学校における外国語教育多様化推進地域事業につながり、また、フランス語・スペイン語教育推進事業では兵庫県で実践研究が行われた。

現行学習指導要領には明確な記述がない。さらに、現場では、教育に対する説明責任の欠如、高校生のニーズに応えていない等の問題点がある。そこで、フランス語の学習指針を策定する必要がある。

フランス語の学習指針を策定するために、策定研究会を開催し、取り組んでいるところである。これは、現状の問題点の打開策になるが、参照対象であり活用を強いるものではない。特徴としては、CEFR に準拠し、16 のテーマ(話題分野)を設定し、4～6 のレベルを想定する予定である。テーマごとに、やりとり、受容的活動や学習項目、必要となる文法項目、語彙、社会文化項目等を盛り込む。また、言語運用能力の向上だけでなく、社会や他者とのかかわり、人間形成も視野に入れる。

課題として、レベルの設定、CEFR にある mediation の扱いなどがあるが、今後は予算を確保し、公開・周知方法を模索し、カリキュラムを開発することなどを考えている。

質疑応答:

指針を作っているということだが、テキストの作成までを考えているのか。

一指針を作るだけでは現場で機能しないだろうから、現場の意見を集約しながら、具体的な授業案やカリキュラム等を参照できる形で提示したい。高等学校を前提として考えており、汎用性の高いものを目指している。

学習指導要領で「英語に準ずる」となっているが、その場合、フランス語で 3000 語だとか A1 や B1 レベルに達するなどとなろうが、そうではなく、フランス語独自の路線を考えているのか。

一高校においての、外国語としてのフランス語学習を考えており、基本的に 2 単位の時間数を想定し、レベル設定を 4～6 と考えた。一元的に考えることはもちろん難しく、今後検討していく。

フランス語特有の歴史的背景も高校生に教えることは有効だろう。期待している。

一フランス語学習を通して概念的なものや哲学的なものを教えることができ、フランス語教育の可能性は大きい。

3. 「日本の韓国朝鮮語教育と韓国の日本語教育の連携による交流学习の可能性」

発表者: 澤邊裕子(宮城学院女子大学)

韓国の中高等教育における日本語教育としては、1972年に第二外国語としての日本語の「教育課程」への正式編入に始まり、日本の高等学校における韓国朝鮮語教育としては、1973年に兵庫県立学校で講座が始まった。

韓国の日本語教育と日本の韓国朝鮮語教育を比較すると、外国語教育制度、学習者数、教師数は大きく異なるが、双方の理念の接点として、日韓の交流やつながりを重視した教育や21世紀のグローバル社会を視野にいれている点を挙げる。

2016年度前期において、Skypeを活用し日本の高校生と韓国の高校生の交流を模索してきた。そして2016年8～11月に、日韓の交流やつながりを重視した教育に関するアンケート調査を実施した。日韓の中高等教育機関の教師を対象に行い、韓国人74名と日本人12名の回答を得た。結果によると、交流校がある場合は、学校訪問、授業参観文化体験などの交流活動を行っている。日本語／韓国語を学ぶ必要性があるとの回答が多かったが、その理由としては、相手国の言語に対する興味を高め、お互いを知り理解することにつながるなどを挙げた。韓国では教育政策の変化により日本語教師の立場が弱くなっており、グローバル人材の育成のためにどのような教育を行っていくべきか等模索する姿も見られた。両国においてお互いの言語を学ぶことは日韓関係におおいに寄与することであり、同世代の交流の重要性を感じている。

課題としては、双方の教育の現場で、授業を提供する学校数が少なく、また非常勤講師が多いことである。さらに、交流活動を後押しする窓口やプラットフォームが必要であり、両国の教員ネットワークづくりが求められる。

質疑応答：

韓国人のエスペラント語を勉強する態度から、言葉に対する文化的な違いがあると思う。韓国人は習ったことばをすぐに話す。具体的なエピソードがあれば教えてほしい。
—Skypeでの交流において、韓国人のほうがりードしてくれ、主体性があり、自信にあふれている。日本の高校生はそこに驚き、学ぶ。この点にも、交流の価値はある。

4. 「言語学習を通じた人間形成—高校における言語教育のあり方—」

発表者：金丸 巧(関東国際高等学校) 北山夏季(関東国際高等学校)

関東国際高等学校で日本語教育またはベトナム教育を担当しており、高校における外国語教育の意味を、言語教育と人間形成の観点で考えたい。ここでは人間形

成を、生徒が自己や他者と向き合い、生き方を模索できる人間になることと考える。言語学習を通してどのように人間形成につなげるかという点を念頭に、日本語授業で2年間、ベトナム語授業で4か月に渡り取り組んだ実践を分析し報告する。

日本語授業において、「移動」というテーマを与え、活動の開始時に「ライフストーリー」に取り組みせ、執筆活動で「書く」作業に専念させ、他の生徒とは違う自分だけの経験を書かせた。そして発表会では質疑応答も含め、自分だけの経験、理解、気持ちを伝えようとする姿勢がみられた。

ベトナム語授業では、まずベトナム語を学ぶ理由を聞いた。英語以外の外国語を学ぶ重要性、もともと外国語を学ぶことが好き、将来の仕事に役立つなどの回答があった。これらは、実は周囲の大人に勧められた理由であったが、この外発的な動機を内発的な動機に変えるために、授業・課外活動・自由活動(放課後や休日)をなるべくベトナム語で埋める仕組みづくりに取り組んだ。その結果、ベトナム語でもっとコミュニケーションを取れるようになりたいと変わってきた。また、ベトナム語が生活の一部となり、ともに学ぶ仲間という自覚が芽生えた。

いずれの場合も、生徒の内面から生まれる思いと言語が結びつく様子が共通して起こり、この背景には「対話」があった。人間形成教育としての言語教育のあり方を考えてみると、①教師と生徒が、互いに経験、知識、考えを交換する視点、②生徒との「対話」を意識して情報共有をする視点、③生徒の「言語学習観」を揺さぶる視点がある。

質疑応答:

母語話者を目指すのではなく人間形成を目標としているようだが、生徒それぞれに目標があるのではないか。日本人のように話せるようになりたいと思う生徒もいるのではないか、そういう場合はどうするのか。

一確かに日本人のように話せる／読めるようになりたいと思う生徒もいるが、いつまでたっても日本人にはなれないので、自分が読みたいものをしっかり読めるようになるということを目指している。

理論と実践にはズレがあるということだが、そのズレとは具体的に何か。

一学校教育の中で、習得すべき漢字など学ばなければいけないものとして、教科書重視になってしまう部分もある。そのバランスは課題である。

週あたりの学習時間やコース、他の生徒との交流や関わりについて教えてほしい。
ーベトナム語を含め、近隣言語 6 言語のコースがあり、ベトナム語の授業は 1 年次 5 時間、2 年次 6 時間、3 年次 8 時間あり、日本語は 10 時間ある。英語もほぼ同数の授業時間数である。また、他の生徒との交流・接点については、ホームルームがベトナム語コース、インドネシア語コース、韓国語コースの生徒で行われ、授業も混在して受けている。

(明治学院大学)